

3-3			
主題	認知症サポーター養成講座に、現場職員が寸劇隊として参加することの効果		
副題	私たち、認知症の利用者と家族の役を演じてみました		
キーワード1	認知症の理解	キーワード2	研究期間 13ヶ月

法人名	社会福祉法人フロンティア		
事業所名	デイセンター事業部		
発表者	西澤 知・熊谷 美奈	アドバイザー	河合 章雄
共同研究者：岡本 マリ・勝股 真穂・深田 ひと美・守屋 慶次郎・榎本 祐子			

電話	03 - 5917 - 6217	FAX	03 - 5917 - 6218
----	------------------	-----	------------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人フロンティアは豊島区を中心に中野区、文京区で高齢者福祉及び障害者福祉を事業展開しており、その中で豊島区内のデイサービス、包括を含む6事業所で構成されているのが、デイセンター事業部である。各事業所がそれぞれ個性のあるサービスを提供し、地域に根ざした施設を目指している。
------------------	---

**《1. 研究前の状況と課題》**

業務の中で認知症利用者への対応について時々疑問に感じることがある。

職員、家族、ヘルパーの認知症に関する理解が足りていないためか、強い言葉、従わせる言葉を使い、声かけしていることだ。忙しさなどを理由に、つい介護者側の都合を優先してしまい、時に利用者の気持ちを置き去りにしていることもあるのではないかな。

さて、厚生労働省が推進する「認知症サポーターキャラバン」の一環として、認知症を正しく理解し、偏見を持たず地域で見守るボランティアを養成する活動「認知症サポーター養成講座（以降「講座」と示す）」がある。

しかし、デイサービスの現場における毎日の業務の中で、私たちの支援対象は介護保険利用者が中心であり、地域への貢献意識は気薄である。もしくは地域に対して何かしたいと考えていても、多忙で取り組めないことがあるという認識も今回の研究を機に顕在化された。

**《2. 研究の目的ならびに仮説》**

H26年度、私たちが所属するデイセンター事業部でも講座を開催することとなり、その一部を担う寸劇隊が結成された。

そこで、下記の3点を仮説として考えた。

- ① 寸劇を通して認知症に関する正しい知識・情報を地域住民、認知症の家族、企業、福祉関係の団体などに分かり易く伝えることで、認知症についてより楽しく学んでもらうことができるのではないかな。
- ② 私たち職員が認知症の人や家族を演じることで、当事者の立場や気持ちをより近くに感じ、職員側ではなく、相手側の気持ちに立つことができるのではないかな。
- ③ これらの活動を通して私たちデイサービス職員も事業所内の支援のみならず、地域にも目を向けることができるようになるのではないかな。

**《3. 具体的な取り組みの内容》**

H26年5月から約1年間の寸劇隊の活動は下

記のとおりである。

※構成メンバー：デイサービスを中心に6事業所より、介護職員、相談員を任意で募集。

※内容：90分の講座のうち、30分程度を担当。寸劇で日常生活の一場面を再現し、認知症か、加齢による物忘れかをクイズ形式で問う（シナリオは講座テキストをもとにオリジナルに作成）。1～2問ごとに回答と解説を伝える。計10問。

※参加実績：地域住民や介護専門職を対象にH26年度3回、H27年度1回実施（H27年度上半期、計3回を既に予定）。開催場所は区の施設や依頼のあった介護保険事業所など。

#### 《4. 取り組みの結果》

- ① アンケートより地域住民の反応。「劇などとても分かりやすくまとめられ、楽しかった」「寸劇隊が良かった」（回答複数）「劇がわかりやすく、ためになった」など好評であった。
- ② ・劇の役の上ではあるが、認知症に対する心無い言葉かけを受け、認知症の立場や気持ちを知った。また認知症の家族の思いも考える様になった。  
・誰が見ても分かりやすい劇となるよう、役づくりにも力を入れた。そのため、認知症利用者の動作や心の動きをより注意深く見るようになった。
- ③ どのように話せば伝わりやすいかなど、地域の人々の目線で考えた。また認知症に対して興味を持っている人が地域にも多く存在するなども知ることができた。
- ④ 他事業所職員、他職種の人と寸劇を一から作り、演じることで一体感が生まれ、日常業務の情報交換もできた。また参加職員を送り出す事業所側も管理者や同僚が寸劇隊の公演に協力するようになり、講座に対しての興味を持ち職員全員で講座の受講に至った事業所もある。

#### 《5. 考察、まとめ》

今回の取り組みから考えられることを以下の3点にまとめてみたい。

- ①寸劇自体が講座参加者へもたらす効果：現在区内でも講座に寸劇を取り入れているのは当事業部

が唯一であり、開催依頼が相次いでいる。それは認知症を学ぶにあたり、説明を聞くだけでなく寸劇による具体例を見て、楽しく参加しながら自ら考えることで一層理解が深まるからではないか。

②職員のケアに関する学び：現場の専門職は、認知症について十分な学びを経てきているが、実際に改めて認知症役、家族役などを演じることはロールプレイの効果として当事者理解に繋がるため、現場での支援にも活かすことができるようになったのではないかと。

③地域への意識の変化：デイサービスの職員は介護保険利用者への支援に傾倒しがちであるが、他事業所との協働により地域住民へ発信する立場を経験することにより、地域の人々の目線で考えたり実践できるようになる。その結果、地域に根ざす事業所として今後どうありたいかを考えられるようになったのではないかと。そしてこれらは、職位や所属組織を超えた協働体制と各事業所の協力により、さらなる効果を生むことが分かった。

#### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究の中で、住民アンケートの内容を記載しているが、個人が特定できるような氏名やイニシャルは用いていない。

#### 《7. 参考文献》

- ・東京都社会福祉協議会センター部会編集/発行（2011）「地域包括支援センター等が行う ネットワークづくりのためのヒント集」
- ・全国キャラバンメイト連絡協議会編集/発行（2013）「認知症サポーター養成講座標準教材 認知症を学び 地域で支えよう」

#### 《8. 提案と発信》

今後、地域包括ケアにおいて地域住民も認知症の正しい理解をもち、日常生活のちょっとした場面で手助けできるようになることがますます求められていく。私たちデイサービス職員はそのような社会状況の理解と啓発の中心となっていく必要がある。特に今後はこの活動を学生向けにも行い、子供の頃から認知症について興味を持ってもらうような働きかけをしていきたい。それをきっかけとしてデイサービスと近隣の学校との交流活動にも発展させていけたらと考えている。